

## 51 ハツカダイコン

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容	施用の目安等
有機質資材 施用技術	<p>○<b>たい肥等有機質資材施用技術</b> 土壌診断に基づき、適切に完熟たい肥等を施用する。</p> <p>○<b>緑肥作物利用技術</b> 緑肥作物（ソルゴー等）を栽培し、作付け前にすき込む。</p>	2 t/10 a
化学肥料 低減技術	<p>○<b>局所施肥技術</b> 局所施肥により肥効率を向上させる。</p> <p>○<b>有機質肥料施用技術</b> 有機質肥料（油かす等）を用いた施肥体系とする。</p>	化学合成窒素量 ・冬春どり 1. 5kg/10a 以内
化学農薬 低減技術	<p>○<b>機械除草技術</b> 除草機械により雑草（畦畔での害虫発生助長植物も含む）を駆除する。</p> <p>○<b>生物農薬利用技術</b> 生物由来の有効成分である農薬の利用により病害虫を駆除する。 ・生物農薬：B T剤（ハセンヨトリ、ヨウムシ）など</p> <p>○<b>熱利用土壌消毒技術</b> 蒸気、太陽熱などの利用により土壌病害虫を駆除する。</p> <p>○<b>光利用技術</b> 光反射資材利用により害虫を忌避させる。</p> <p>○<b>被覆栽培技術</b> 被覆資材により有害動植物の付着を防止する。 ・防虫ネット（ハセンヨトリ、ヨウムシ）など</p> <p>○<b>フェロモン剤利用技術</b> フェロモン剤の利用により害虫の大量誘殺や交信を攪乱させる。 ・リトルア剤（ハセンヨトリ）など</p> <p>○<b>マルチ栽培技術</b> 紫外線反射マルチ、生分解性マルチ、稲わら等利用により有害動植物のまん延防止する。</p>	化学合成農薬成分回数 ・冬春どり 2成分以内
<p>その他の留意事項</p> <p>有機質資材施用で肥料効果が期待できる時は減肥する。</p> <p>連作障害回避のため輪作に努める。</p> <p>収穫後の残さを適切に処分する。</p>		